

全文構造解説

この冊子の使い方

1つの文について、【英文】→【構造】→【解説】→【語句】の順で並んでいる。

1. 【英文】を音読する。構造と内容が理解できれば、次の【英文】に進んでよい。理解できなければ、
2. 【構造】を音読する。文の構造と、まとめりごとの訳（直訳）を確認する。さらに、必要に応じて、
3. 【解説】を読む。直訳を咀嚼して、要するにどういうことを言っているのか、内容の理解を試みる。
この時点で理解できなければ、「解答・解説」の日本語訳（意識）で内容を確認する。
4. 理解した内容を念頭に、構造と内容が理解できるまで、繰り返し【英文】と【構造】を音読する。
5. 【語句】を音読して、意味を確認する。

最後にもう一度、できれば二度三度、本文英文を、できるだけ速く、頭から意味をとりながら読むこと。

凡例および注意点

凡例：

① = 大問番号 ❶ = 段落番号 ❶ = 文番号

構造 = 【構造】

主 = 主語（部） 動 = 動詞（句） 目 = 目的語（句・節） 補・名 = 補語となる名詞

副 = 副詞（句・節） 関代 = 関係代名詞 過分 = 過去分詞 など

「 」 = 直前部分までの訳（直訳中心）

[] / { } / [[]] など = 注意を要する、句や節などの意味のまとめり

*❶ = 【解説】とくに注意を要する箇所の指摘および解説

暗例 = 例文（句や節を含む）。暗唱できるようになることを強くお勧めする

() = 省略可、あるいは補足・別表現

[] = 直前の語句との入れ換え可

< > = 重要な用語、あるいは構文・イディオム

語句 = 【語句】

[|] = 発音。左側が発音記号。右側が発音時の目安となるカタカナ表記で、ゴシック体はアクセント

⇒ = 派生語・反意語 など

注意：

【構造】と【解説】は、既出表現や構造が平易な英文については、簡略化、あるいは省略することがある

凡例： [主]主語、[目]目的語、[接]接続詞、[補・形]補語となる形容詞、[副]副詞 など

第1問A

0 ① Your dormitory roommate Julie has sent a text message to your mobile phone with a request.

構造 [主] Your dormitory roommate Julie 「あなたの寄宿舎のルームメイトであるジュリーは」 [動]^{*1} has sent [目]^{*2} a text message 「文字メッセージを送った」 [副]^{*3} to your mobile phone 「あなたの携帯電話に」 [副] with a request. 「要望を伴って」

*1: 現在完了形 (have + 過去分詞) は、過去の行動や状態が現在にも関わっていることを示す。ここでは「過去に送ったメッセージが現在もある」ことを表している。

*2: 動詞の動作の対象 (目的) となる名詞を (目的語) といい、主語 (必ず名詞) と内容的に異なる点で (補語) とは異なる。補語は、主語と目的語を「補う語」という意味の名詞か形容詞で、例えば be 動詞に続く補語は、主語と内容的にイコールになる (主格補語) という。なお、動詞が目的語をとるとき、この動詞を (他動詞) という。動詞が目的語をとらないとき、あるいは目的語をとるために前置詞を必要とするとき、この動詞を (自動詞) という。

*3: <前置詞 + 名詞> の意味のまとまりは副詞句と考えたよ。このときの名詞を (前置詞の目的語) という。なお、副詞 (句・節) は (文の要素) ではないので、置き場所が比較的自由であり、なくても文法的な文は成立する。これに対して、文の要素である主語 S、(述語) 動詞 V、目的語 O、補語 C は、並ぶ順番が決まっており、必要なものが欠けると文法的な文が成立しない。副詞の性質と、文の要素とそれに対応する品詞 (名詞、動詞、形容詞)、およびその形 (句・節) を正しく理解することは、英文解釈の土台となる基本である。

語句 dormitory [dɔːrmətɔːri | ドミトリー] [名] 「寄宿舎」、mobile [məʊbaɪl | モウバイウ] [形] 「動かせる、移動型の」、request [rɪkwest | リクウエスト] [名] 「要望」

* * * * *

[メッセージ]

1 ① Help!!!

構造 [動]^{*1} Help!!! 「助けて!!!」

*1: 動詞の原形で始める文を (命令文) といい、基本的に相手への強制を促す強い表現。わかりきった主語の You を省略したものが、相手との関係性や内容、文脈によってニュアンスはかなり異なってくる。使うときには副詞 please を加えて和らげる方が無難だろう。ちなみに、命令文にあえて主語 You を加えると、かなり高圧的な命令になる。

2 ① Last night I saved my history homework on a USB memory stick.

構造 [副]^{*1} Last night 「昨夜」 [主] I [動] saved [目] my history homework 「私は自分の歴史の宿題を保存した」 [副] on ^{*2} a USB memory stick. 「USB メモリスティックに」

語句 save [seɪv | セイウ] [動] 「救う、(データを) 保存する」、USB memory stick [stɪk | ステク] 「USB メモリスティック (※ USB 規格に準拠した、データ保存装置の一種)」

*1: 文の冒頭の副詞 (句・節) は、主節や主語との境界をはっきりさせるために、コンマを打つのが基本。ただし、短いときは、このように省略されることも多い。

*2: 初出の可算名詞には不定冠詞 a/an を使う。同じ名詞が次に現れるときには、定冠詞 the を付けたり、代名詞 it になったりする。

② I was going to print it in the university library this afternoon, but I forgot to bring the USB with me.

構造 [主] I [動]^{*1} was going to print [目] it 「私はそれを印刷するつもりだった」 [副] in the university library 「大学の図書館で」 [副] this afternoon, 「この午後」 [接] but 「しかし」 [主] I [動] forgot ^{*2} to bring [目] the USB [副] with me. 「私はその USB を自分で持ってくるのを忘れてしまった」

*1: 未来の行動や状態への予定を表す (be going to do) 「～するつもりである」。ここは過去形なので、過去において「(未来に)～するつもりだった」という意味になる。参考までに、よく対比される助動詞 will は意志を含み、比較的突発的な決断などを表せる。なお、本書では動詞の意味のまとまりとして扱う。例えば、助動詞や否定語 not、want to do 「～したい」なども 1つの動詞の意味のまとまりとして扱うほうが実践的だからである (want to do は本来、want が動詞、to do はその目的語となる不定詞の名詞的用法)。

*2: 本来は、(動) forgot [目] [to bring [目] the USB] という構造だが、forget to do 「～し忘れる」で 1つの動詞の意味のまとまりとした。to 不定詞には主に 3つの用法 (名詞的「～すること」、副詞的「～するために」、形容詞的「～するための」) があるが、そのどれにも前置詞 to 「～に向かう」未来指向のイメージが含まれる。ここでは、「(過去の時点で、未来に) 持って行き忘れた」というイメージ。forget doing のように動名詞になると、「(過去に)～したことを忘れる」という意味になる。違いを覚えておくこと。

語句 print [print | プリント] [動] 「印刷する」、forget to do 「～し忘れる」

③ I need to give a copy to my teacher by 4 p.m. today.

構造 [主] I [動] need to give [目] a copy 「私はコピーを渡す必要がある」 [副] to my teacher 「先生に」 [副] by 4 p.m. 「午後4時までに」 [副] today. 「今日」

語句 copy [kɔːpi | コピ] [名] 「(本や CD、データなどの) 印刷物、複製品」

④ Can you bring my USB to the library?

構造 [動]^{*1} [Can [主] you bring] [目] my USB 「私の USB を持ってこられますか」 [副] to the library? 「図書館に」

*1: 本冊子の構造部分は、原則として直訳的な常体 (丁寧語を使わない文体) とするが、疑問文で表現しづらいときには、このように敬体とすることがある。

⑤ I think it's on top of my history book on my desk.

構造 [主] I [動] think 「私は考える」 [目]^{*1} [主] [動] it's [副]^{*2} on top of my history book 「それは私の歴史の教科書のいちばん上にある (ということを)」 [副] on my desk. 「私の机の上の」

*1: (文) の冒頭に接続詞 that を置くことで名詞節に変換できる。ここは、it's on top of my history book on my desk. 「それは私の机の上の歴史の教科書の上にある。」という文が、冒頭に接続詞 that を置くことで名詞節に変換されたもので、その名詞節が動詞 think の目的語になっていると考える。このような、接続詞 that が導く名詞節を that 節というが、that はこのようによく省略される。なお、(節) とは (主語 + 動詞) 構造を中心とする意味のまとまりのこと。この文では、I think が主節、that 節 (名詞節) は主節に従うので (従属節) ともいう。

*2: be 動詞は存在を表す。とくに be 動詞に場所を表す副詞句が続くときは「存在する」の意味をイメージするとわかりやすくなる。

⑥ I don't need the book, just the USB. ♡

構造 主 I 動 don't need 目 the book, 「私はその本を必要としない」 目 *1 just the USB. ♡「(そうではなく) その USB だけ(必要とする)」

*1: コンマのあとは、(I need) just the USB の、目的語だけを述べたもの。直感的にわかるだろう。

* * * * *

3 ① Sorry Julie, I couldn't find it.

構造 補・形 *1 Sorry Julie, 「残念だけドジュリー」 主 I 動 couldn't find 目 it. 「私はそれを見つけられなかった」

*1: I am (sorry) が省略されたものと判断する。be 動詞に続く形容詞なので、〈文の要素〉としての補語。続く Julie は呼びかけ。

② The history book was there, but there was no USB memory stick.

構造 主 The history book 動 was 副 there, 「歴史の教科書はそこにあった」 接 but 「でも」 副 *1 there 動 was 主 no USB memory stick. 「USB メモリースティックはなかった」

*1: 〈there is/are 構文〉は、動詞のあとに主語がくる倒置構文。there は副詞だが、とくに意味を持たない。主に初出の存在情報を述べるときに使うことが多い。なお、この主語 no は、続く名詞 USB memory stick を修飾する形容詞で、not ~ at all 「まったく~ない」とほぼ同じ強調的な意味と考えてよい。名詞を否定することで文全体を否定する日本語にはない表現なので、繰り返し音読して感覚をつかむこと。

③ I looked for it everywhere, even under your desk.

構造 主 I 動 *1 looked for 目 it 「私はそれを探した」 副 everywhere, even under your desk. 「あらゆるところ、あなたの机の下さえ」

*1: look for ~ 「~を探す」は、〈動詞+前置詞〉の2語で1つの動詞の意味の熟語と考えてもよい。つまり、動 look 副 for it でなく、動 look for 目 it と考えるということ。複数の語で1つの意味のまとまりをなすもの(厳密には〈主語+動詞〉構造を中心としないもの)を〈句〉というが、句が動詞になるものを〈句動詞〉という。句動詞には他に〈動詞+副詞〉の形をとるものもある。以降、句動詞と判断できるものは、上と同様の示し方をすることもある。ただ、句動詞をそのまま覚えるよりも、動詞と前置詞や副詞を切り離して、それぞれの意味を考えることにも大きなメリットはある。句動詞の意味を覚える際には、いったん語のレベルに分解・直訳して、「なぜその句動詞の意味になるのか」をイメージしてみるとよい。

語句 everywhere [évriweə | エヴリウエア] 副 「どこでも、あらゆるところで」

④ Are you sure you don't have it with you?

構造 動 Are 主 you 補・形 sure 「確かですか」 *1 [主 you 動 don't have 目 it 副 with you]? 「あなたがそれを持っていない(ということ)」

*1: be sure that ~ 「~ということは確かである」で、ここでは接続詞 that は省略されている。sure は〈補語〉となる形容詞で、続く that 節は be sure の対象となる内容(名詞節)を表すが、ふつうこの that 節を目的語とはいわない。be sure that ~ の語法として覚えてしまうとよい。なお、補語とは〈文の要素〉の1つで、主語や目的語を補って説明する形容詞あるいは名詞のこと。ここでは、形容詞 sure は、主語 you を補って説明する(内容的にイコールになる)と考えるので、主格補語。

⑤ I'll bring your laptop computer with me, just in case.

構造 主 動 I'll bring 目 your laptop computer 副 with me *1, 「私はあなたのノートパソコンを持って行く」 副 *2 just in case. 「念のために」

*1: コンマは、比較的重要ではない情報を追加するときにも使われ、ここでは「念のために」という副詞句を付加している。副詞は文の要素ではないので、コンマを伴って文頭や文末に付加、あるいは文中に挿入されることが多い。

*2: in case ~ は接続詞句として「~の場合のために、~するといかないから」の意味で、例えば、**暗例** I'll bring the laptop in case you need it. 「あなたがノートパソコンを必要とする場合のために、それを持って行くよ。」のように使う。ここでは、in case に続く節の部分は内容が明らかなので省略されている。just は強調だが、just in case で「(ただ) 念のために」を意味する熟語(副詞句)として覚えるとうよい。

語句 laptop [læptɒp | ラプトプ] 名 「(ヒザの上→) ノートパソコン」、just in case 「念のため」

* * * * *

④ ① You were right!

構造 主 You 動 were 補・形 right! 「あなたが正しかった」

② I did have it.

構造 主 I 動 *1 did have 目 it. 「私が確かにそれを持っていた」

*1: 強調を表す助動詞 do で、「確かに」などの意味を補うとよい。主語や時制によって does や did に変化する。ここは過去形なので did。**暗例** She does know about our secret. 「彼女は確かに私たちの秘密を知っている。」

③ It was at the bottom of my bag.

構造 主 It 動 was 副 at the bottom of my bag. 「それはバッグの底にあった」

語句 bottom [bɒtəm | ボトム] 名 「底」

④ What a relief!

構造 *1 What a relief! 「なんて安心だ!」

*1: 感嘆文。〈What + 名詞 (+主語+動詞)!〉や〈How + 形容詞/副詞 (+主語+動詞)!〉で「なんと~だ!」の意味。ただし、感嘆文を古くさい大きな表現と感じる人や皮肉でしか使わない人もいる。とくに、How を使う感嘆文は使用を避けた方がよい。

⑤ ① Thanks anyway. ☺

構造 間 *1 Thanks 副 anyway. ☺ 「とにかくありがとう」

*1: 間投詞とした。Thank you のくだけた形と考えればよいが、ここでは名詞扱い。

語句 anyway [éniwei | エニウエイ] 副 「いずれにせよ、とにかく」